ウノ・シグネウス

オットー・サロモン　著
横山悦生　訳

1877 年 6 月初旬のある日，美しい夏の夕方であった。森に囲まれた細長いペイェネ湖を渡る 10 時間の長い航海を経て，ラッティス発の蒸気船はその湖の北岸に位置する小さな町ユベスキュラ(Jyväskylä)に近づく。船はゆっくりと桟橋に接近する。その船は，大人の男女や子どもたちの特別な集団で一杯であった。突然，旅行者たちは迎える人たちの通りの良い声が響き渡るのを聞いた。「わたしたちのフィンランド！そのとき星々は輝き，天は青みがかりました」等々を静寂の夕べに交換した。蒸気船が係留されると，乗客の頭が船内から現れ，ハンカチが振られる。情熱的な掛け声が聞こえる。「ようこそ，フィンランドの民衆学校の父シグネウス！」

傑出した教育者，情熱的な愛国者，フィンランドの民衆学校制度の創始者である，ウノ・シグネウスが逝った知らせを聞いた時，私の心の中に多くの記憶のなかの一つの記憶が現れた。私はその人を再び想い起こす。フィンランドの森の松がその幹を上にまっすぐに向かっていくように，背筋がまっすぐに伸びている彼は，恐れられる権力者としてでなく，父親のような親しい人として，教師と生徒の周りを歩く。百ほどの目が愛情と尊敬の視線をその人にどのように向けるのか，その信心深い静けさの中で人々は彼の話を聞いている。子どもたちを教育するためにフィンランドの田舎に行く準備ができた若者たちに向けて，彼らの卒業する日に彼が以下のようなことを話す。

「民衆学校に関することは神聖であり，その仕事は神への礼拝であることを，よく覚えておいてください。」

私はなぜこの人の行為がこれほど偉大になり得たのかを同時に理解する。彼が与えたものは，金よりも知識よりも労働力よりも疑いなく愛であった。

ウノ・シグネウス（Uno Cygnæus）は，1810 年 10 月 12 日にタヴァステフース(Tavastehus)で生まれた。学校を卒業した 17 歳の時，彼は大学に入学した。彼はそこで 1836 年に哲学修士の学位を授与された。その時シグネウスは牧師の資格を得て，ヴィボルクで牧師助手になると同時に，その町の刑務所の説教師となった。しかし，彼は祖国フィンランドに長くは留まらなかった。当時は北西のアメリカにあったロシアの植民地にいたフィンランド人の小さなグループが牧師を必要とした。シグネウスはその仕事が多くの点で魅力的でなかったにもかかわらず，それに応じた。1839 年 9 月，彼は最果ての地の仕事場へと旅立って，ケープホルン付近の海峡を通って，北アレハンゲルスクに 1840 年 5 月に到着した。彼の伝記を書いた著者が言うように，「ここでフィンランドの民衆学校が生まれた」。文明世界から隔たり，ほとんどが身分の低い者に囲まれつつ，その若い牧師は人間の道徳的で知的な教育に最も適した方法を究明する情熱を次第に強くしながら，太平洋の海岸に沿って孤独なさすらいの旅をした。シグネウスはペスタロッチやフレーベルによって主張された素晴らしい基本テーゼを理解し始めると同時に，若い世代の人間形成に自分の生涯を捧げることに決心を固めた。この決心に刺激され，アメリカでの 5 年間の滞在の後，オホーツクとシベリアを経由して，ロシアのペテルブルグに向かった。ペテルブルグでは 1846 年から 1858 年まで滞在し，そこに住んでいるフィンランド人の宗教の教師として働いた。

1858 年は彼の決意の実行にとって機が熟した年であった。ロシア皇帝とフィンランド大公を兼ねる戴冠式を終えたばかりのアレクサンダー二世は，フィンランド大公としてフィンランド大公国を初めて訪問した際に，歴史的に重要な元老院会議において，時代の要求にあった完全な民衆学校をフィンランドに設置することに関する見解を公表した。元老院の命令に基づいて，フィンランドの 3 つの司教管区の枢機卿会議によって決定された提案は，称賛すべき慣行にしたがって，その問題に関心のある人にそれについて注意を喚起し，自らの意見を表明することを奨励することをもって，一般の人々が検討するために提示された。こうした理由でさまざまな意見が寄せられたが，それらの中に，その課題のさらなる発展にとって重要なものが一つだけあった。その題名は，『フィンランドにおいて計画される民衆学校についてのいくつかの見解』で，この著者は牧師ウノ・シグネウスであった。その提案はひとつでしたが，それは重要でした。それは正当な注目もまた引き起こした。シグネウスは，国の一般財源の援助によって，教育に関する外国への調査旅行をした後に，このテーマについてさらなる報告書を提出するという元老院からの任務を与え

られ，その後シグネウスがそれを実行した。さらに。この報告で述べられた基本テーゼは主要な部分が承認された。シグネウスは民衆学校の視学官の長官に任命され，同時にユベスキュラで新たに設置される師範学校の校長に任命され，自らの計画を実現する機会を与えられた。

多くの人にとって，シグネウスの計画は少なくとも奇妙であった。当時のきまりきったやり方の学校管理という印象のもとで成長した人々にとって,「新奇な」思想と人が考えたところの，その計画は正しくないか，あるいは少なくとも実現不可能なものと思われたにちがいない。しかし，シグネウスは―このことは彼の名誉に値しようが―祖国の未来の民衆学校を決して新たな，人跡未踏の道に導こうとしたのではなかった。シグネウスは彼らの先駆者であるペスタロッチやフレーベルを学んだだけでなく,《理解した》。特に民衆学校が次第に本来の目的《子どもの発達とそれによる訓育（uppfostran）のための施設》から離れていったことを明確に理解するようになった。ペスタロッチの学校の当時のほとんどの教育者はペスタロッチの精神を理解することができず,それを適用することすら知らなかったことを彼は理解した。実際，彼が目指したことは新しいことでなく，ごく単純なことで言わばその教育技術の再興であり，その教育技術は第一に大多数の子どもたちの教育が委託される教育施設に適用されるべきであった。ペスタロッチ主義者としてその名前だけでなく，その精神も持っていたシグネウスは，民衆学校を国民共通の基礎学校であると考えた。「身分の高い人も低い人も，貧しい人も豊かな人も，大統領の息子も小作の息子も，みんながこの育成学校に入学して，そこではみんなが平等で，そこでは階級の差はなく，祖国のすべての子どもが，共通の母の胸から同じ栄養を吸収する」

他にもシグネウスは，学校では神への畏怖や倫理の教育の方が教科を教えることよりもはるかに重要であり，より偉大な任務であるべきだと熱烈に強調し，身体の教育に対しても正当に考慮する必要があると強調する。このために，またもう一つの教育の目的のためにも，彼は肉体労働，すなわちスロイドに学校の時間割の中において重要な位置を与えることを主張した。しかしながら，民衆学校においてスロイドをすべて手工業的に実施することは，形式的陶冶の旗を十分に高く掲げていないとして，たとえ教育的スロイドの熱心な支持者であってもシグネウス自身が不信感を抱くような忌々しい行為であった。シグネウスはまた師範学校と民衆学校のカリキュラムにその一つの教科としてスロイドを導入した最初の国であるというに栄誉を疑いなくフィンランドに与えた。女子の教育，未来の母親たちの教育は彼にとって第一の優先事項であり，合理的に子どもの世話をすることを実践的に学ぶ機会を民衆学校の女生徒たちに与えた。シグネウスは民衆学校のそばに保育園を設置することに熱心であった。簡潔に言えば，シグネウスは自らが創設したフィンランドの民衆学校が実践的な方向に進むことを，またその教育の方法が発展することを望んだ。

シグネウスは，著作活動にほとんど従事しなかった。彼は，個人的な手紙や，なによりも「行動」を通して教育問題に関する自らの考えを話し言葉で伝えた。訓育の技術の発展に対する彼の功績―歴史はそれが大変な功績であることを確かに認めるであろう―は，偏見や抵抗に屈せず，彼以前の他の人々願望としたことを，大きくみて遂行しえたことである。信仰に篤く，知性があり，忍耐力に富み，愛情深く，友情に篤く，彼はフィンランドにおいて常にますます発展していく民衆学校に記念碑を建てました。それは，未来の世代がシグネウスの人生を語る記念碑となるであろう。彼について何かを語るとすれば，ルンネベリの言葉が適しているだろう。

“功績の栄誉は闘争の大地の上で芽を出す。
より勇敢な戦士がそこでは血を降らすであろうか？
武器なき者が強くなるように敬意が払われ，英雄の勇気が発揮されますように“

（1888 年）